

Ⅱ 全体研究会

第1回 全体研究会

報告題目	多様化した仏教の現代的自律性についてーオウム事件から何を学ぶのかー
開催日時	2010年6月8日(火) 17:00~19:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎本館講堂
報告者	佐々木閑(花園大学教授)
参加人数	110人

【ファシリテーター】 桂紹隆(龍谷大学文学部教授)

【コメンテーター】 若原雄昭(龍谷大学理工学部教授)

入澤 崇(龍谷大学文学部教授)

佐藤智水(龍谷大学文学部教授)

【報告のポイント】

現在、世界各地にひろまった仏教は、多様な様相を呈している。報告者の佐々木閑氏は、こうした多様化した仏教の根本要因について、仏教僧団の分裂を意味する「破僧」の定義が変化していく過程に着目する。そのうえで仏教の多様化の最末端といえる日本のオウム真理教の教団運営の問題点を取り上げ、仏教の現代的自律性についても課題を提起した。

【報告の概要】

インド仏教史上、仏教僧団の分裂を意味する「破僧」には、『十誦律』卷三十七にみられるように、仏説に反する見解を主張して独自の集団を形成する「破法輪(cakrabheda)」と、『摩訶僧祇律』卷三十二にみられる、一つの僧団内で別個に布薩などの僧団行事を行う「破羯磨(karmabheda)」という二つの定義が存在した。律文献の比較分析からは、前者がより古い定義で、それが後に後者の定義に変更されていったことがわかる。この事実は、僧団和合を勧めるアショーカ王碑文(分裂法勅)からも確認されることから、この大きな変化はアショーカ王時代に起きた可能性が高いと、佐々木氏は言う。

また、佐々木氏は、この「破僧」の定義の変化に関して以下のような仮説を立てる。かつて仏教僧団の間に争いが起こると、「破法輪」の定義に基づいて互いに「破僧集団」と非難しあっていた。しかし破僧の定義を「破羯磨」へ変更することで、集団行事にさえ参加していれば、異なる教義を主張するものが同じ僧団で居住していても支障はない、という通念を持つに至った。要するに教義を一本化せずに和合することが可能となる構造が新たにできあがった。この仮説の妥当性は、『ディーパヴァンサ』などの歴史書や『婆沙論』によって、補強することができる。

破僧定義の緩和は、「教えの単一性」というタガで締められていた仏教世界に、よりゆるやかな「儀礼通過」というタガをはめることになった。このタガの変容こそが、部派仏教

の展開や大乘仏教の発生という、仏教の多様化の要因となっていた。つまり、組織の多様化とは、旧来のタガが、より緩い別のタガに取って代わられることによって生じる分裂現象である。多様化の実相をつかむためには、タガの変化を見る必要がある、と佐々木氏は分析する。

この分析を受けて、佐々木氏は、現代にも続く仏教の多様化の一例として、オウム真理教の事例を取り上げた。オウム真理教の教理自体を非仏教的と批判することはできない。なぜならば教えの違いはタガにならないからである。しかし、その出家制度をみると、出家時に全財産を提出させ、家族とも絶縁させた事例がある。現在の多様化した日本仏教においても、かろうじて共通していたタガとは「出家者は、布施（いただいたもの）によって生きる」という姿勢で社会と関係するという生活態度であった。オウム真理教はこのタガをはずし、組織としての新たなタガを何も用意しなかったことで、社会と軋轢を起こしていった。

以上、本報告は、その実相を総体的に捉えることが困難となっている仏教の多様化の要因が、「破僧」定義の転換と、それにともなう「タガ」の変化の過程にあることを立証している。

また、仏教の多様化の一端にオウム真理教を位置づけ、旧来のタガに変わる新たなタガの不在が引き起こす事態としてオウム事件を分析したことにより、事件が顕在化するまで静観し、未だこの事件に対する評価が不十分と言わざるを得ない日本仏教の自律性の脆弱さを露呈させた。

このような状況の反省から現代における出家の定義や仏教と社会との関係のあり方を構築し直すことが、多様化した仏教の現代的自律性を考える上で喫緊の課題である。

【議論の概要】

若原雄昭氏は、インド仏教においては、今回の考察に用いられた律資料などには、ニカーヤというものを超えた多様性を容認するという意識はみられるのかという質問を行った。これに対し佐々木氏は、大乘思想はニカーヤの分類を超えた多様性とみられると述べた。さらに若原氏は、その出家の在り方が歪んでいたにしろ、オウム真理教は出家なき日本仏教に出家を突き付けてみせた点で衝撃的であったと述べた。佐々木氏はその出家を持ち込んだ点に若い人が惹き付けられたことは考慮すべきものであり、オウム真理教の出家の方法が間違っただと入信した人たちが気付かなかったことは本人たちのみの責任ではなく、我々も十分斟酌すべき問題と述べた。

入澤崇氏は、アショーカ時代に破僧の定義が変容した背景について、インド世界と非インド世界の接触、相互間の葛藤も関係があるのではないかという指摘を行った。さらに、佐藤智水氏は、オウム事件が1980年代半ばから90年代はじめという社会の比較的安定した時期に起こったことに対し、中国南北朝期における類似の事例を挙げつつ、社会の転覆・破壊を志向する宗教集団が、なぜ安定した社会背景のもとに出現するのかという新たな問いを提起した。そして、地域的・時代的社会状況との関連についても視野に入れる必要性が喚起された。



【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第2回 全体研究会

報告題目	「中国における崇仏と排仏—なぜ、仏教は排斥されるのか—」
開催日時	2011年1月13日(木) 17:00~18:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎本館講堂
報告者	木村宣彰(大谷大学名誉教授・前学長)
参加人数	74人

【ファシリテーター】 桂紹隆(龍谷大学文学部教授)

【コメンテーター】 若原雄昭(龍谷大学理工学部教授)

入澤 崇(龍谷大学文学部教授)

佐藤智水(龍谷大学文学部教授)

【報告のポイント】

文化13年(1816)頃、武陽隠士なる人物によって記された『世事見聞録』には、当時の寺社の様子や僧の豪華な生活が描写され、「今の世にては神仏はもはや国賊である」と痛烈な批判が記されている。一方、塚本善隆氏は「今日の仏教の研究は隆盛である。しかも、これは明治初年の廃仏毀釈のおかげであると思う」と述べている。

武陽隠士から見ると好き放題していた仏教が、半世紀後の明治初年には排仏されるというのは、如何なる意味を持っているのか。木村宣彰氏は、中国における崇仏・排仏の推移について魏晉南北朝時代を中心に解説し、現代仏教が担うべき課題を提起した。

【報告の概要】

中国では仏教伝来以降、大きな排仏はなかった。それは、未だ仏教の影響力が大きくなく、黄老思想と同様に不死長生の信仰と理解されていたためであると木村氏は述べる。習鑿齒「与釈道安書」(『弘明集』巻12)は、東晋明帝の崇仏の様子を伝えているが、これは中国仏教史における一つの転換点であり、何らかの契機があったと考えなければならない。

その原因として、木村氏は永嘉の乱以降の五胡の侵入を挙げた。このような状況から、東晋では外来の宗教である仏教に対する関心が高まり、とりわけ因果応報という思想は王侯貴族に大きな衝撃を与えた。

やがて避役・免税のための出家者が現れ、真の沙門とは言えない者が多くなると、沙門を選別する「沙汰」の問題が起こる。同時期の北方では、法顕が戒律によって教団のあり方を律しようとしており、中国全土で同様の問題が発生していた様子が想起される。

一方、北方の後趙の石勒・石虎は、神異僧である仏図澄を崇敬していた。その後、前秦苻堅・後秦姚興は大軍を動員して釈道安・鳩摩羅什を求めた。一見、石勒・石虎や苻堅、姚興は崇仏者のように見えるが、それは神異僧の力によって国の繁栄を図ることが目的であった。木村氏は、北涼の沮渠蒙遜が『涅槃経』を求めてインドに行きたいと言った曇無讖を暗殺した例を挙げ、これが果たして真の崇仏と言えるのか疑問であると指摘する。

このように、北方では「役に立たなければ切り捨てる」という論理で排仏が実行された

が、その契機となるのは南方の「沙汰」の問題に見られるような僧個人の資質、「人間」の問題である。この風潮は、やがて「三武一宗の法難」を発生させるに至った。

こうした仏教の抱える問題については、顔之推『顔氏家訓』帰心篇に指摘がある。中でも、僧尼の修行が粗雑で純粋さに欠けている点、金銀を贅沢に使って、租税や労役を避け、国益に反している点は、『世事見聞録』にも見え、現代にも通じる問題である。この問題に対して信念を持って説くことが、仏教に対する信仰を喚起する契機となると木村氏は提言した。

今日、政治や外交における様々な問題が噴出しているが、その根本には「人間の劣化」が影響していると木村氏は言う。人間が立派にならなければ、国の有様も立派にならない。空海は「物の興廃は人に由る」と記しており、その人を育てるのは偏に仏法であると言う。こうした点を考慮すれば、「仏教」によって「人を育てる」仏教系の大学が担う使命は大きいと木村氏は提言した。

以上、本報告は北朝・南朝の状況を対比することによって、中国における崇仏・排仏の諸相を描き出し、そこから「人を育てる」という現代仏教、とりわけ仏教系大学の果たすべき役割について提起するものであった。

【議論の概要】

佐藤智水氏は、桓玄が仏教教団の墮落を述べている箇所「避役は百里に鍾り、逋逃は寺廟に盈つ」という記載から、当時の仏教教団が社会矛盾を引き受ける一つの窓口になっていた可能性を指摘した。また、翻って現代において、困ったときに寺院に駆け込む人がどれくらいいるかということを考えると、現代の問題としても考える余地があるのではないかと提起した。

若原雄昭氏は、中国の仏教において、国家仏教と民衆レベルと攘災招福の仏教、そしてそのどちらでもない、本来の人間の内面を問うような仏教の理解というものがどのような形で展開し、受け継がれていたのかという根本的な疑問が喚起されると述べた。

入澤崇氏は、破仏王プシャミトラと崇仏王アショーカが『雑阿含経』や『阿育王経』などではセットで出てくる例や、エフタルの破仏の例を挙げ、崇仏と破仏は背中合わせになっていると指摘した。我々は護国仏教と破仏を別に考えがちであるが、仏教者の方が破仏を述べることによって仏法興隆を願おうとしたと考ええると、護国と背中合わせの破仏という可能性を想起させられる報告であったと述べた。

以上のような指摘を受けて、木村氏は改めて排仏の後に仏教が興隆するという点を強調した。木村氏は、現在、我々は緩やかな排仏の中におり、それをどう打破していくかということが大きな課題ではないかと述べた。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター